

<実践報告>

中学校社会科における「歴史的な見方・考え方」を高める授業の構想(3)
 —「特別の教科 道徳」との連携を中心に—

矢澤拓真 信州大学教育学部附属長野中学校
 武井正樹 信州大学教育学部附属長野中学校
 百田美希 信州大学教育学部附属長野中学校
 高柳充利 信州大学学術研究院教育学系
 篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

Creating Lessons for Enhancing “Historical Perspectives”
 in Junior High School Social Studies (3) :

Collaboration between Social Studies and Special Subject Morality

YAZAWA Takuma: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

TAKEI Masaki: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

MOMOTA Miki: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

TAKAYANAGI Mitsutoshi: Institute of Education, Shinshu University

SHINOZAKI Masanori: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	生徒の「歴史的な見方・考え方」を高める上で、社会科歴史的分野の学びと特別の教科「道徳」の学びとの連携の有効性を検討すること。
キーワード	中学校社会科 歴史的な見方・考え方 「特別の教科 道徳」
実践の目的	中学校社会科歴史的分野の授業改善
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部附属長野中学校 2年生 (40名)
実践期間	2019年12月
実践研究の方法と経過	①社会科歴史的分野と「道徳」の学習内容との関連の考察, ②社会科歴史的分野と「道徳」との連携を意識した授業の構想と実践, ③②における生徒の「歴史的な見方・考え方」の高まりの検証.
実践から得られた知見・提言	社会科歴史的分野で培われる知識や技能に加え、「道徳」での学びの成果も視野に入れることで、生徒の「歴史的な見方・考え方」の更なる伸長が望めること。

1. はじめに

中学校社会科歴史的分野（以下、「歴史」）の学習指導では、「歴史的な見方・考え方」を働かせて課題解決を行うことが重要な課題となっている。この背景には、新学習指導要領（『中学校学習指導要領解説 社会編』、以下、『新要領』）で、見方・考え方を働かせて課題解決を行うことが重視されたからである。そのため、「歴史的な見方・考え方」については、定義（大友 2018 など）、働かせるための方法と働きを可視化する方法（草原 2017 など）、「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業作り（佐伯 2019 など）等が模索されてきた。一方で、社会科における見方・考え方を高める上で、他教科や領域との連携が重要であることも雑誌『社会科教育』で特集が組まれて指摘されている（石丸 2020 など）。

こうした研究状況を踏まえ、筆者らは、「歴史」と「総合的な学習の時間」（以下、「総合」）の連携の有効性を検討した。その結果、「総合」の実感的な学びを通して形成された知識や技能が「歴史的な見方・考え方」の高まりに寄与することを指摘した（武井ほか 2019）。したがって、「総合」以外で社会科との関連性が高い教科や領域との連携についても検討することで、新たな「歴史的な見方・考え方」を高める授業作りの方策が見出せると考える。

そこで本実践では、「特別の教科 道徳」（以下、「道徳」）との連携に着目する。その理由は、次の2つである。第一は、社会科と「道徳」との関係性の高さからである。戦後の道徳教育のあり方は、戦後初期に成立した社会科との関わりの中で模索されてきた（貝塚 2001 など）。また、『新要領』でも、両者の学習内容の関連の高さから、連携することが推進されている（文部科学省 2017b）。第二は、実践レベルで社会科と「道徳」の連携の重要性が認識され、特定の単元開発の研究が行われているからである（古川 2019 など）。

以上を踏まえ、本実践では、生徒の「歴史的な見方・考え方」を高める上での「歴史」の学びと「道徳」の学びとの連携の有効性を検討することを目的とする。

そこで、本実践では次の研究方法を用いる。まず、本実践で用いる「歴史的な見方・考え方」は、（矢澤ほか 2018）（武井ほか 2019）で用いた表 1 の定義による。これは、『新要領』の内容から「歴史学習において考察したり、選択・判断したりする際の視点や方法（考え方）として用いられるもの」と捉え、「歴史」の目標(2)(3)（文部科学省 2017a）を「見方」「考え方」の点から整理したものである。

次に、本実践の手続きは次の3つである。第一は、「歴史」と「道徳」の学習内容の関わりを考察すること。第二は、「道徳」との連携を意識した「歴史」の単元を構想すること。第三は、構想した「歴史」の単元を実践し、学習過程と学習後における生徒の「歴史的な

表 1 「歴史的な見方・考え方」の定義

歴史的な見方の基本	歴史的な考え方の基本
<ul style="list-style-type: none">・時期、年代などの時系列に関わる視点・展開、変化、継続など諸事象の推移に関わる視点・類似、差異、特色など諸事象の比較に関わる視点・背景、原因、結果、影響など事象相互のつながりに関わる視点	<ul style="list-style-type: none">・歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色や、事象相互の関連を多面的・多角的に考察する (A)・歴史に見られる課題を把握して、学習したことを基に複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する (B)

見方・考え方」の高まりを「道徳」での学びとの関わりを踏まえて考察すること。

2. 「歴史」と「道徳」の学習内容の関わり

2.1 「社会」と連携させた「道徳」授業の実施

「道徳」では、人の心の温かさに触れながら、よりよく生きていこうとする生徒の姿を目指し、物事を多面的・多角的に考える力と道徳的心情の育成を重視している。

上記を具体化するための手がかりが、社会科（以下、「社会」）を中心とする他教科・領域との連携である。対象クラスでは、表2のように「社会」と連携して「道徳」を実施した。これは、「社会」で行った道徳的価値に触れた学習を「道徳」で補い、「道徳」で考えたことが「社会」で想起され、繰り返し考える機会になることを想定したからである。

表2によれば、「道徳」と「社会」との連携は、A「道徳」・地理的分野（以下「地理」）、B「道徳」・「歴史」の2つがある。Aは、②題材「私の町」と単元「日本の様々な地域」、Bは、①題材「民主主義と多数決の近くて遠い関係」と単元「武士の台頭と鎌倉幕府」、③題材「ある武士親子の決断」と単元「ヨーロッパ人との出会いと天下統一」、④題材「私の生きる道」と単元「二度の世界大戦と日本」の3つである。このうち、「歴史的な見方・考え方」の育成に関わるのは、Bの3つの授業である。以下では、Bの3つの授業の中から③を取り上げて、③における「道徳」の内容を検討したい。

表2 「社会」と「道徳」との関わり

月	教科	授業名	授業の概要
5	① 道徳	題材「民主主義と多数決の近くて遠い関係」	多くの異なる意見を一つにまとめる際の決め方について、何を大切に決めてよいかについて考える。（項目C-(10)）
	社会/歴史	単元「武士の台頭と鎌倉幕府」(執権政治の確立)	
8	② 道徳	題材「私の町」	観光や生活のため開発が進む町の現状と、その町の伝統文化を大切に守りたいという思いについて考える。（項目C-(18)）
	社会/地理	単元「日本の様々な地域」(東北地方の文化)	
12	③ 道徳	題材「ある武士親子の決断」	本稿「2.」「3.」参照 (項目C-(14))
	社会/歴史	単元「ヨーロッパ人との出会いと天下統一」(犬伏の別れ)	
3	④ 道徳	題材「私の生きる道」	人間には弱さや醜さを克服する気高さがあることを理解し、人間として生きることの喜びを見出す。（項目D-(22)）
	社会/歴史	単元「二度の世界大戦と日本」(第二次世界大戦における日本)	

2.2 「歴史」との関連を意識した「道徳」の授業—題材「ある武士親子の決断」

本時のねらいは、家族愛、家庭生活の充実を自覚し、自分自身の家族に対する敬愛の気持ちを深めることである。そこで、長野県を代表する武将で、生徒が親しみやすい真田家の「犬伏の別れ」をモチーフにして作成した自作教材「ある武士親子の決断」を扱う。「犬伏の別れ」とは、1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いの前に、下野国犬伏宿で真田親子（昌幸、信幸、幸村）が、徳川方と豊臣方に分かれて戦うことを決断した出来事と言われる（長野県史刊行会編 1987, 平山 2016）。「犬伏の別れ」は、当時の武家社会における忠義や恩顧心がありながらも、親子の絆や愛情の深さを知ることのできる貴重なものである。本時では、「歴史」で「犬伏の別れ」を扱う前提として「ある武士親子の決断」を扱う。

時は戦国時代。信濃の国を二分する「川中島の合戦」を目前に、家族会議を開いている小さな武士の家族がいました。会議を開くに至った背景には、戦が始まる直前に、武田軍、上杉軍どちらの陣営からも、私たちに味方をするようにという命令が下ったためです。

どちらが勝利するのは、戦が行われてみないと分かりません。味方する側が勝利すれば、その後の生活は安泰、負ければそれは、家族全員の死を意味します。武田軍側に味方すべきか上杉軍側に味方すべきか、それとも別の方法をとるべきなのか、決断を急がなくては戦が始まってしまいます。会議の中で、家長である父は「家族が別れて戦う」、兄は「どちらかの味方に付き戦う」、弟は「逃げる」を主張しました。あなたなら、この三つのうち、どの選択肢を選びますか。

本時の授業展開が表3である。本時では、武士親子の置かれた状況を確認した生徒は、川中島の合戦を前に、どのような決断をすればよいか悩み始める。そして、「家族が別れて戦う」「どちらか一方に味方する」「武士の身分を捨てて家族全員で逃げる」の三つの選択肢を基に、親子が納得できる決断の在り方について語り合うことを通して、生徒は、家族とは何かについて考えを深めていくことをねらっている。

①主眼

家族とは何かについて考える場面で、仮想の武士親子の置かれた状況を提示し、その中に登場する親子の立場になって役割演技を行い、親子それぞれの立場の心境を語り合うことを通して、自身の家族に対する敬愛の気持ちを深めることができる。

②本時の評価基準

自身に向けられた家族の深い愛情や支えに気づき、家族に対する敬愛の気持ちを深めている。

③展開

表3 題材「ある武士親子の決断」の展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助 評価	時間	備考
問題把握	1 本時のテーマを確認する。	ア テスト結果が返ってきて、親にずいぶん怒られた。その都度イライラする。 イ いつも塾の送迎やテスト前に夜食の準備をしてくれて感謝しかない。 ウ 武田側に味方すべきか、上杉側に味方すべきだろうか。	◇最近の家族とのかかわりについて問い、テーマを設定する。 テーマ：家族とは何か ◇仮想の武士親子が置かれた状況を示し、中心発問を提示する。 中心発問：家族として、どう決断していけばよいだろうか。	5分	
	2 中心発問について、役割演技をしながら議論する。	エ どちらかに別れて戦いをすることも可能性として有りうる。 オ 戦わないで逃げるほうが死んでしまう可能性は低い。 カ 別れて戦い、自分が生き残ったとしても、いなくなった家族のことが頭から離れないだろう。 キ 戦わず逃げるとしたら、武士として生活ができなくなる。生活が苦しい。 ク 貧しい生活は嫌だ。だけど、家族が別れて戦うのも考えられない。だから、どちらかの味方について戦えば、もしかしたら勝	◇「家族で武田、上杉に別れて戦う」「家族全員でどちらかに味方し戦う」「戦いに参加しないで逃げる」の3つの選択肢から現段階での考えを確認する。 ◇3人グループを組み、親役と子ども役になって役割演技を行い、どう決断すればよいかを議論するように促す。 ◇教師は、生徒が選択しない役で話し始める。その後、根拠や生活経験が挙がるような問い掛けを終始行うようにする。 ◇役割演技が終わったところで、全体共	15分	
追					

究 ／ ま と め	3 役割演技から、それぞれの立場の心情について語り合う。	<p>てるかもしれない。</p> <p>ケ 僕は、家族全員でどちらかに味方して戦えばよいと思っていた。でも、役割演技を見ていて、段々戦うことが家族の幸せではないように思えてきた。皆が確実に生き残ることが大切だ。</p> <p>コ そう考えると、貧しい生活になったとしても、やはりいつまでも家族で過ごす生活を選択したい。</p>	<p>有の場を設ける。</p> <p>◇「家族で武田、上杉に別れて戦う」「家族全員でどちらかに味方し戦う」「戦いに参加しないで逃げる」のどの立場にいるかを問い、理由を問う。</p> <p>◇補助発問「どの人の発言に考えさせられましたか」「役割演技をした2名は、どんなことを感じましたか」「父親はどんなことを考えながら、子どもと議論を交わしたと思いますか」と問い、自己の家族への思いを想起させる。</p>	20分	学習カード
	4 本時の学習を振り返る。	<p>サ 真剣な顔で話す父の話を聞いて、自分の親だったらと考えた。自分の子どもと殺し合いをしなくてはならない状況を決断するとしたら、そこには相当の覚悟があつての決断だ。</p> <p>シ この話と全て一緒ではないだろうが自分の親も反発があると分かっているながらも伝えるという決断をしているのだろう。それは僕への愛情だろうか。</p> <p>ス 家族とは、なくてはならない存在。家族がいるからこそ、今の自分があるし、これからの自分もあると思う。家族のありがたみを感じながらも、今の自分は家族を安心させる存在になっていない。</p>	<p>◇考えた理由を板書し、家族を思うそれぞれの気持ちを共通点として挙げる。</p> <p>◇立場の違いによる考え方や感じ方の違いに触れている考えを取り上げ、全体に広げる。</p> <p>◇本時を振り返り、「家族とは何か」についての考えを学習カードにまとめるように促す。</p> <p>◇スのような、家族からの愛情を感じている振り返りを全体で紹介する。</p>		

自身に向けられた家族の深い愛情や支えに気づき、家族に対する敬愛の気持ちを深めている。(発言・学習カード)

3. 「道徳」との連携を意識した「歴史」の授業開発

3.1 授業の開発と意図

「2」で取りあげた「道徳」の題材「ある武士親子の決断」は、家族愛、家庭生活の充実を自覚し、自分自身の家族に対する敬愛の気持ちを深めることがねらいであった。「歴史」では、「道徳」で学んだ道徳的価値や経験を生かし、戦国時代における真田家が家族を分けて関ヶ原の戦いに臨むことを決断した理由を「歴史的な見方・考え方」を働かせて、各自が多面的・多角的に捉えなおすことで、より深い学びに繋がるように組織した。

3.2 単元の構想

A. 単元名・学年（時間） 「ヨーロッパ人との出会いと天下統一」・2年（7時間扱い）

B. 単元の目標

- ①近世の歴史的事象に関する理解を深め、それに関わる世界の動きを理解し、その知識を身につけている。(知識・技能)
- ②近世の歴史的事象に関わる資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、考察した過程や結果を多面的・多角的に考察したり、説明したりしている。(思考・判断・表現)
- ③キリスト教布教のためにアジアに進出をしようとしたヨーロッパの動きや戦国大名の活躍など、近世の歴史的事象に関心を持ち、単元を貫く学習問題を意欲的に追究している。(主体的に学習に取り組む態度)

C. 単元展開

表4 単元「ヨーロッパ人との出会いと天下統一」の単元展開

学習内容	◇学習活動	○評価規準	時間	「道徳」との関連
1 単元を貫く学習問題を設定し、単元の見通しをもつ。	◇小学校の学習を想起させ、単元を貫く学習問題を設定する。 戦国大名はどのようにして力を付けていったのだろう。	③戦国大名が台頭していくことについて、関心を高めようとしている。	1	
2 ヨーロッパのアジア進出の背景と日本人との結びつきについて調べ、まとめる。	◇宗教改革が起きた背景やその影響を確認し、その後の動きについてまとめる。 ◇ヨーロッパ人が日本にもたらした影響についてまとめる。 ◇その後の日本におけるキリスト教などの拡がりや庶民、為政者との関わりについてまとめる。	②宗教改革とその後の動きに関わる資料を収集し、適切に選択して活用している。	2	
3 織田信長、豊臣秀吉の活躍について調べ、まとめる。	◇織田信長が行った政策やヨーロッパ人との結びつきについてまとめる。 ◇豊臣秀吉が行った政策やヨーロッパ人への対応の変化についてまとめる。	②戦国大名が国を統一していく動きやヨーロッパ人とのつながりについて、資料を収集し、考察した過程や結果を多面的・多角的に考察している。	2	
4 関ヶ原の戦いに臨む真田家の決断について調べ、まとめる。	本時案（「3.3 本時（第6時）の展開」参照）	本時案（「3.3 本時（第6時）の展開」参照）	1 本時	「ある武士親子の決断」の学習を想起させる。
5 単元を貫く学習問題について追究したことを発表する。	◇これまでの学習を踏まえ、グループで考えをまとめる。 ◇課題に対する自分の考えを記入し、発表する。	①近世の歴史的事象に関する理解を深め、それに関わる世界の動きを理解し、その知識を身につけている。	1	

3.3 本時（第6時）の展開

①主眼 「犬伏の別れ」において真田昌幸が家族を分けて戦をすることを決断した理由を考える場面で、昌幸、信之、幸村の置かれた立場の違いに着目して、3者が徳川、豊臣の家臣として権力を持った過程や妻をめとることで生まれた徳川、豊臣への忠義について調べることを通して、真田家が徳川方、豊臣方に分かれて戦に挑んだ理由が分かる。

②本時の評価規準

A評価 真田家が2つに分かれて戦いを決断した理由について、複数の資料から考察をし、現代の立場から自分の考えをまとめている。

B評価 真田家が2つに分かれて戦いを決断した理由について、複数の資料から考察している。

③展開

表5 単元「ヨーロッパ人との出会いと天下統一」（第6時）の展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助	時間	備考
問題把	1 資料「犬伏の別れ」から、学習問題を設定	ア 関ヶ原の戦いの直前に、徳川、石田両陣営から味方するように書状が届いた。 イ 真田家は、犬伏の地で家族が集まって会議を開くことを決めた。 ウ 会議の中で、父である真田昌幸は、父と息子の幸村は豊臣方、息子の信之は徳	◇導入資料「犬伏の別れ」を提示し、真田家の関ヶ原の戦い以前の動きについて確認をする。 ◇書状を受けて家族会議を開いた結果、父昌幸が豊臣、徳川両陣営に家族が別れて戦をす	5分	資料「犬伏の別れ」

握	する。	川方に味方することを選択した。 エ なぜ父は、家族で別れて戦うことを決断したのだろうか。	る決断をしたことを示す。 ◇エの発言で学習問題を設定する。	10分	学習カード
		<p>学習問題：なぜ父は、別れて戦うことを決断したのだろうか。</p> オ 別れて戦うことで、真田家にとって何かメリットあったのではないか。 カ 父は、戦によって息子2人を死なせたくなくて、どちらか一人でも生き残らせなかったのではないか。 キ 家族会議を開いたということは、3人の考えを開いたうえでの決断。それぞれの思いが違っていて、そこに折り合いを付けたのではないだろうか。	◇学習問題に対する予想を各自で立てるように促す。 ◇予想を発表する場面では、別れて戦うことを決断した父昌幸の目的や3者の考え方の違いに着目していくようにする。 ◇3者の立場の違いや考え方の違いが出されていく中で、学習課題を設定する。		
追	学習課題を設定する。	学習課題：3者の立場の違いに着目して考えよう。		20分	資料①「真田家と父立場」
		ク 資料①より、石田家と真田家は、昔から親戚関係にあったことが分かる。 ケ 資料①より、真田家は徳川と大きな戦を起こしており、仲が悪かった。 コ 資料②より、兄の信之は、妻を徳川方である本田家より迎えている。一方で、弟の幸村は、豊臣方である大谷家から妻を迎え入れている。 サ 資料③より、関ヶ原の戦い後、兄信之は父と弟の助命を訴え、家族全員が生きながらえることができた。	◇資料①から、真田家が大名となるには、豊臣家の庇護がなくてはならなかったことを抑えさせる。 ◇資料②から、兄弟が真田信之、幸村兄弟は、異なる大名の庇護を受けながら力をつけてきたことを抑えさせる。 ◇資料③から、異なる立場で戦いながらも家族の命を守ることを大切にすることをおさえさせる。		
究	個人で考える。	シ 資料①②より、真田家は、昔から豊臣の有力な家臣の石田家と親戚関係にあったが、真田家が大名として力をつけた過程には、徳川の力も影響している。 ス 真田家は、これまで世話になった事への恩を返すことや家族の命を守り、家を残すためにできることを考えていた。 セ 真田昌幸は、家族や家を守ることやこれまでの忠義を大事にしたため、家族を二つに分けて戦うことを決断した。 ソ 戦国時代、家を守るという目的の中には、家族への愛や忠義心があった。今の時代の価値観と同じ、やはり家族を第一に決断をしたのだと思う。	◇個人で読み取った資料の内容について発表するように促す。 ◇生徒の発言を受けて、キーワード「忠義」「信頼」「恩義」でまとめながら、3者の立場の違いを事象同士でつなげていく。 ◇セのように、真田家が家を守るためやこれまでの忠義の心から決断をしたことを抑える。 ◇ソのように、当時の真田家の選択が、現代の価値観にもつながってくることを書いた生徒の考えを紹介する。	10分	資料②「兄、弟の立場の違い」
		4 グループや全体で考える。			
／	5	これまでの追及を振り返り、自分の考えをまとめる。		5分	資料③「関ヶ原の戦いのその後」

4. 生徒の「歴史的な見方・考え方」への「道徳」の学びの影響

4.1 本時における生徒の「歴史的な見方・考え方」の高まり

本時（表5）で生徒の「歴史的な見方・考え方」の高まりが見られたのは、資料（①真田家と父の立場、②兄、弟の立場の違い、③関ヶ原の戦いのその後）との関連付けの根拠を述べる場面である。

本時の学習問題に対して、S生は、グループの意見交換の中で次のように発言した。

S：私は、父親の昌幸は豊臣側の家臣として大名となり、豊臣家の信頼を裏切ることではできなかったことと、兄の信之は、徳川側の家臣として大名となり、徳川家の信頼を裏切ることができなかったためと考えました。よって、①②の資料が根拠になると考えられます。

O：私は、江戸幕府ができて後、幕府が減じるまで真田家は大名として上田を治めることができました。父昌幸は、真田家を大名として守るためにと考えました。よって、③の資料が根拠と

なっています。

G：私は、①②③の全ての資料が関連して昌幸の決断に至ったと考えます。なぜなら、兄は徳川側から、弟は豊臣側から妻を娶り、親戚関係であることや、昌幸がそれぞれの親戚にあたる軍に味方について戦う方法を選択することで、どちらか一方が勝利を収めるはずなので、それによって、真田家という家を守ろうとしたのだと思います。

T：確かに、私も G さんの考えから、昌幸は、豊臣、徳川両家からの信頼を裏切ることはできないことと、真田の家を後世に残すという大きな二つの理由が重なってこのような決断になったのだと思います。いずれにせよ、昌幸は真田家を残すために、苦しい決断をしなくてはいけなかったということですね。家族が別れて戦うということが、実際に起こっていたと考ええると、私には考えられないことです。

ここで S 生は、資料①②を根拠とした。これは、昌幸、信之、幸村の三者が力をつける過程、信之、幸村が豊臣、徳川と関わりの深い大名から妻を娶った事実から、両家からの信頼を得るための決断と捉えたことが主な理由である。しかし、友との意見交換の中で、関ヶ原の戦いで負け戦をすることで、真田家が滅び、大名としての立場を失うこと、武士として家や領地を守ることが目的である（資料③）ことが分かってきた。その結果、「権力者との信頼関係を維持する」ためという、真田家の歩みのみで判断していた T 生が、関ヶ原の戦い以後の「真田家の行く末」に目を向け、家や領地を守ること、権力者との関わり、今後の真田家への影響という事象同士のつながりに着目することで、昌幸が判断した理由が明確になってきた。ゆえに、本時のまとめの学習カードには、次の記述が見られた。

戦国時代は、家や領地を守るために、自分の家族の命までも犠牲にしなくてはいけない時代。それほど家を守るということは武士にとって大事なことだった。加えて、真田昌幸、信之、幸村は、それぞれ異なる権力者の下について力をつけてきた。その人たちから信頼を勝ち取るためには、最後までその権力者に従うことが大名として生き残る手段の一つでもあった。そして、どちらが勝つのか分からない中で、どちらへも忠義を果たし、真田家という家を守るためには、別れて戦うことが良いのだと思った。私は、家族を敵、味方に分けて戦うことを決断した真田昌幸は、一見冷たい人のように見えるが、何よりも家族のことを思い、苦しいながらもこの決断をしたのではないかと考える。家族を分けて戦をすることを本当はしたくなかったのではないかと考える。そんな昌幸は武士として、一人の人間としてとても立派な人物である。

ここから S 生は、戦国時代の大名として家や領地を守るものの価値に加え、3 者の立場の違いに着目して、徳川、豊臣の家臣として権力を持つ過程に目を向けたことが分かる。また、豊臣、徳川の両者に付くことが、真田家一族を存続させる最善の手段であることが明確になった。S 生は、事象の比較に加え、複数の立場を踏まえ事象同士のつながりを結ぶ因果関係に気付き、当時の武士社会の営みを中心とした考察ができていくことが分かる。

さらに S 生は、「歴史」で学んだ武士として家族や家を守るものの価値を考察し、父昌幸が家族に対して抱いていた思いを想像しながら、自らが「道徳」で考えた父親の胸中を振り返った。また、父昌幸の決断に対して、本当は家族で別れて戦うことが嫌だったのでないかと想像し、父は家族思いで、武士として立派な人物であると感想をまとめた。この背景には、「道徳」で家族の在り方について考えた上で、「歴史」で当時の武士が家を守るものの価値を学んだことが影響していると推察される。このような S 生の姿は、「道徳」

と「歴史」を連携させることで「歴史的な見方・考え方」が高まってきた姿と解釈できる。

4.2 単元を通した生徒の「歴史的な見方・考え方」の高まり

本実践を行った学級とは別の学級で、「道徳」と連携せずに同単元を行った。単元の学習問題について考える場面で、H生は次の記述をしている。

戦国大名は、宗教改革がきっかけで、アジアに進出をしたヨーロッパの人々と結びつきを強めることで、力を強めていった。その中でも、織田信長は、南蛮貿易を活発に行い、ヨーロッパの進んだ技術を取り入れながら戦を勝ち抜き、戦国大名としての地位を確立していった。また、真田家のように、力のない大名は、力のある大名に従い、血縁関係を結んだり、戦で共に戦ったりすることなどによって、大名としての地位を安堵してもらえるようにし、一方で力のある大名はそのような大名を取り込んでいくことで、さらに力をつけていったと言える。

単元（表4）の学習問題について考える場面で、次のような生徒の「歴史的な見方・考え方」の高まりが見られた。S生は、次の記述をしている。

戦国大名が力をもつことになった理由の一つには、ヨーロッパで起きた宗教改革が影響している。キリスト教の布教に行き詰まりを見せたカトリック教会は、アジアに目を付け、キリスト教の布教だけでなく、交易までも行うようになった。そんな中で日本は、応仁の乱などで室町幕府の力が衰退し、各地の大名や武士たちはやがて、戦国大名となり、より強い権力を手に入れるために、ヨーロッパの商人と結びつきを強めた。二つ目は、強い者に従いながら忠義を果たすことで力を大きくしていったことにある。信州上田を領地とする真田家のように、大名として家や領地を守るために、戦において、家族を敵、味方に分けて戦うという、苦しい決断をする大名もいた。力の弱い大名は、勝利を収めた大名の信頼を得て、家や領地を守ることで力を着実に付けていった。

H生は、戦国大名の成長をヨーロッパのキリスト教布教のためのアジア進出の動きとの関わりに着目して追究した。その中で、戦国大名が力をつけた原因を、キリスト教布教や交易のためのアジア進出と力を付けたい戦国大名との利害関係の一致、為政者が弱小の大名を取り囲んでの勢力の成長を踏まえてまとめた。これは、単元目標「近世の歴史的事象に関わる資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、考察した過程や結果を多面的・多角的に考察したり、説明したりしている。（思考・判断・表現）」に達した姿と捉える。

一方で、S生はH生のように、キリスト教の摂取やアジア進出の影響、力のある者に従って力をつけてきたことに加え、真田家を例に力のあるものに従う時の弱者の状況や大名の心境に触れてまとめを記入した。これは、「道徳」で弱者の立場に置かれた大名の心境を考えた結果、当時の状況を身近に捉え、多面的・多角的に考察した姿と捉えることができる。

このようにS生は、「歴史」の中で「道徳」での追究の成果を持ち寄り、自分事として歴史的事象を捉えることで、「歴史的な見方・考え方」を働かせながら多面的・多角的に歴史的事象を考察することができたため、より深い学びになったと言える。

5. おわりに

本実践より、「道德」での追究の成果を持ち寄り、自分事として歴史的事象を捉えることで多面的・多角的に歴史的事象を考察する生徒の姿が確認できた。同時に、「歴史」「道德」を意識した学習問題の設定により、生徒は、2教科の「見方・考え方」を働かせて追究を深めることも確認できた。こうした生徒の姿は、「道德」と連携を意識して「歴史」の授業を行うことが、生徒の「歴史的な見方・考え方」を高める上で有効であることを意味する。

しかしながら、本実践では単元を通した「歴史」「道德」の連携には至らなかった。今後は、単元を見通した連携の在り方を意識しながら、「歴史的な見方・考え方」を高めるための授業づくりについて継続して研究を進めることとする。

文献

- 平山優, 2016, 真田信之, PHP 新書, 東京
- 古川雄嗣, 2019, 小・中学校道徳科及び社会科, 並びに高等学校公民科の接続・連携に向けて—予備的考察としての新学習指導要領の分析—, 北海道教育大学紀要 教育科学編, 70(1), pp.41-51
- 石丸哲史, 2020, 見方・考え方を深める 他教科との連携の意義と方法, 社会科教育, 731, pp.4-9
- 草原和博, 児玉泰輔, 山本稜, 吉川友則, 茂松郁弥, 河原洸亮, 2017, 歴史的な見方・考え方の働きはいかに可視化できるか—思考ツールを用いた歴史導入単元「江戸時代の朝顔ブーム」を手がかりに—, 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部, 66, pp.41-50
- 貝塚茂樹, 2001, 戦後教育改革と道徳教育問題, 日本図書センター, 東京
- 文部科学省, 2017a, 中学校学習指導要領解説 社会編
- 文部科学省, 2017b, 中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編
- 長野県史刊行会編, 1987, 長野県史 通史編 第四 近世一, 長野県史刊行会, 長野
- 大友秀明, 2018, 歴史の授業と教材—見方・考え方について—, 埼玉大学紀要 教育学部, 67(1), pp.143-149
- 佐伯綱義, 2019, 歴史的な見方・考え方を働かせ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくり—「明治維新」の授業を通して, 社会と人間, 13, pp.15-22
- 武井正樹, 矢澤拓真, 百田美希, 志村佳名子, 篠崎正典, 2019, 中学校社会科における「歴史的な見方・考え方」を高める授業の構想(2)—「総合的な学習の時間」との連携を中心に—, 教育実践研究, 18, pp.99-108
- 上田市編, 1974, 上田市史 上巻, 信濃毎日新聞社, 長野
- 矢澤拓真, 武井正樹, 小池克昌, 篠崎正典, 2018, 中学校社会科における「歴史的な見方・考え方」を高める授業の構想—単元「江戸時代のなぞにせまる」の開発と実践を通して—, 教育実践研究, 17, pp.51-60

(2020年9月24日 受付)